

マリア・ミースのサブシステンス・パースペクティブ

—エコフェミニズムとイリイチの再読を通して—

Maria Mies's Subsistence Perspective: Rethinking Ecofeminism and Illich

伊 吹 美貴子

Mikiko IBUKI

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

要 約

本稿の課題は、M. ミースのサブシステンスの視座からエコフェミニズムを読みなおし、I. イリイチの議論とつきあわせることにより、サブシステンス論の射程を明らかにすることである。サブシステンスとは、第一義的には生の再生産の基盤である。歴史的に、人々の自律的で、コモンズと結びついたサブシステンスは、資本主義の浸透によって、市場経済にとってかわられた。ミースによれば、この過程は、自然、女性、第三世界の人々の生産の成果が収奪されていく過程であり、女性についてはとくに「主婦化」として言及される。サブシステンスはこの過程で、男性の賃労働者および資本主義に従属し、「シャドウワーク」となっていった。しかし、ミースは、サブシステンスは同時に資本主義へのオルタナティブな社会・経済を胚胎するものだと示唆する。本稿は、このサブシステンスの両義性という観点から、ミースおよびイリイチの議論を再読し、その可能性を検討する。

[Abstract]

This paper aims to rethink ecofeminism and make linkages between Maria Mies and Ivan Illich in terms of their subsistence perspective. Subsistence is the basis for the reproduction of life and was associated with the commons, which had been historically autonomous from capitalism. With the expansion of capitalism, subsistence has been replaced by the market economy. According to Mies, this process expropriates women, people of the South, nature, and their production and, in relation to women, she calls it “housewifization.” In this process, subsistence has become subordinated to male waged workers and capitalism, transforming into what Illich calls “shadow work”. Mies, at the same time, suggests that subsistence contains the seed of society/economy that is alternative to capitalism. From this ambivalent perspective of subsistence, this paper reconsiders Mies and Illich’s arguments and assesses their potentiality.

はじめに

本稿の課題は、マリア・ミースやヴェロニカ・ベンホルト＝トムゼン、クラウディア・フォン・ヴェールホフのサブシステンスの視座からエコフェミニズムを読みなおし、それをイヴァン・イリイチの議論とつきあわせることにより、サブシステンス論の射程を明らかにすることである。

この試みは、東日本大震災の原発事故によって、再び、問題提起された事がらに端を発している。環境汚染の被害に敏感に反応した母親たちは、「子どもたちを守りたい」、「私たちの未来を

守りたい」と声を上げた¹。かつてのチェルノブイリ原発事故の後と同じ状況が繰り返されたのである。当時、「母として」の立場から、環境問題に取り組み、声を上げる女性たちは「母性主義」的であるとして、フェミニズムによって、そのあり方が問い返された²。しかしそうした批判は現在でもなりたちうるのだろうか——あるいはかつての批判はどの程度、妥当なものだったのだろうか。本稿は、サブシステムの両義性から、「母性主義」に還元できない問題領域が存在することを明らかにする試みである。

1 日本におけるエコフェミニズム

1-1 イリイチとエコフェミニ論争

エコフェミニズムは日本において特別な事情のもとで紹介された。それは1985年に行われた上野千鶴子と青木やよひによる「エコフェミニ論争」である³。エコロジカル・フェミニズム(エコフェミニズムに同じ)を掲げる青木は、上野によって、女性の身体性、「産む性」を媒介にして女性と自然を結びつける性差の本質主義であると読まれた⁴。エコフェミニズムは青木の主張と重ね合わせられ、「母性主義」という理解がなされるようになった。

青木のエコフェミニズムが否定的に理解されたのは、前述した内容によるものだけではない。萩原なつ子によれば、エコフェミニズムは二つに分類できるという。一つは、「女性と自然との新しい神秘的な関係を強調し、女性の価値を賛美するカルチュラル・エコフェミニズム」である。もう一つは、これを批判し、「男性／女性、文化／自然というヒエラルキーの二元論構造」を拒否しながら、「人間の解放と自然の解放を求める社会的な運動」であろうとする「ソーシャル・エコフェミニズム」である(萩原 1997:299-302)。青木のエコフェミニズムは前者の傾向が強く、否定的な評価を与えられてきた。また同時に、日本では、このカルチュラル・エコフェミニズムこそがエコフェミニズムとして理解されてきた⁵。

さらに、この論争において重要であるのは、上野がイリイチのジェンダー論を青木のエコフェミニズムにひきつけて徹底的に批判したことである。イリイチと青木は近代産業社会批判、開発主義批判において共鳴しあっているものの、両者の主張は同じではない。だが、これまでイリイチは青木のエコフェミニズムと密接に結びつけられてきた。

上野による「女は世界を救えるか——イリイチ「ジェンダー」論徹底批判——」⁶はそのタイトルの通りイリイチを徹底的に批判する論文である。確かに、イリイチは、経済成長を前提に男性との平等(特に賃労働)を求めるリベラルなフェミニストたちを批判し、反成長を主張し、前近代のジェンダーを論じた。フェミニストたちによって、こうしたイリイチは前近代を理想化していると考えられ、批判されてきたのである⁷。

1-2 イリイチとミースの間の分断

エコフェミニ論争の後、日本でもエコフェミニズムは多様な理論的営為からなっていることが次第に紹介されるようになる。

なかでも注目すべきなのは、ミースやヴェールホフらを招いて「女性・環境・平和」シンポジウム(1994年)が開かれたことである。ミースはこのときに「エコフェミニズムは世界を癒せるか」というタイトルで講演をしている。これらの内容をもとにして『リプロダクティブ・ヘルスと環

境——共に生きる世界へ』（綿貫, 上野編 1996）がまとめられた。上野はミースのエコフェミニズムには共感を寄せたのであった。なお、萩原によればミースはソーシャル・エコフェミニズムに分類される（萩原 1997:301）。このように、ミースたちを介して、日本のフェミニズムの主流においてもエコフェミニズムへの理解が広がることとなった⁸。しかし、この契機において、ミースたちの研究のキーワードであるサブシステムについては焦点化されることはなかった。

その代わり、このシンポジウムの記録として重点が置かれているのは「リプロダクティブ・ヘルス」である。もちろん、このリプロダクティブ・ヘルス（「性と生殖に関する健康」）もチェルノブイリ原発事故などで特に注目を集めることとなった重要な社会的課題である。綿貫礼子はこの概念を媒介にしてエコフェミニズムの基本的な認識を提示している。そのうちの以下の二点を取り上げておきたい。第一に、人間は「生命系」であり男性も女性もともに「内なる自然」である身体を持つ存在である。それゆえ、環境汚染は健康被害をもたらすものである。第二に、エコフェミニズムは「世代間の倫理や価値意識にかかわる思想」であり、「世代間の「共生」という価値」を社会の中心に位置づけようとするものである（綿貫 1996:16-67）。

このように、エコフェミニズムの問題提起が肯定的に明確化されたことは、エコフェミニズムにとっての一定の前進であるだろう。しかし、依然として残された課題がある。イリイチとエコフェミニズムの連続性ないし親和性である。

イリイチとミースはともにサブシステムの視座を持ってその研究を行っている。だが、イリイチは上野により手厳しく批判される。その一方で同じ上野はミースに共感を寄せてきた。こうした矛盾した評価をふまえれば、日本のフェミニズムの主流のなかで、イリイチとミースが共通して持つサブシステムの視座については、その意義は十分に議論されているとは言えない。

次節以降で、ミースおよびイリイチのサブシステムの視座を明らかにしたい。サブシステムとは「生存」や「自給」、「生業」、「生存維持」⁹などと訳され、多義的であり、文脈によってその意味は大きく変化する。しかし、共通するのは、生の再生産の基盤であることである。サブシステムの視座は、私たちが自然や他者との関わりのなかで生きられる条件を構成していることに目を向けさせる。ミースやイリイチが、サブシステムの概念によって浮き彫りにするのは、資本主義経済の浸透による、人間と自然の関わり、社会関係、特にジェンダー関係の歴史的変化である。

2 ミースのサブシステム・アプローチ

ミースたちは、フェミニズムとエコロジー、さらに南北問題の視点から、グローバル経済を批判的に分析する。女性、自然、第三世界をつなぐ一つ概念が「サブシステム生産」であった。ミースたちは、グローバル経済のなかで不可視化されながらも包摂されている、例えばドイツのミドルクラスの主婦や母親とメキシコやインドの小農民のあいだに、共通点を見いだした。それは、彼らが「生きるための食糧を買うために貨幣の獲得をすること」ではなく「食糧と生を生産することと維持することに直接的に」関係があるという点である（Bennholdt-Thomsen and Mies 1999:11）。ここでは簡単に、「サブシステム生産」とは、賃労働による「商品の生産」と対比されるものであると押さえておきたい。

ミースたちは、研究の初期において、グローバル経済を下支えしながら搾取されるサブシステ

ンスに着目していた¹⁰。しかし、「視座を転換」し、サブシステムはグローバル経済のオルタナティブを胚胎するものだと考えるようになる。この転換を「世界システム・パースペクティブ」から「サブシステム・パースペクティブ」への転換として以下にまとめた。

2-1 世界システム・パースペクティブ

ミースはグローバル経済を氷山モデルで表している。この氷山モデルによれば、世界は「資本」を頂点とする一つのシステムである。GDPに算出される「可視の経済」である、「賃労働者(等価交換による労働契約)」はグローバル経済全体のごく一部にすぎず、水面下に広がる「不可視の経済」がその土台となっていることがこのモデルによって表されている。水面下には、「家内労働者、インフォーマルセクター、児童労働、サブシステム農民の労働、家事労働—女性、植民地／南側諸国や東ヨーロッパなど」が置かれる。そして、最底辺に広がるのは、「自然」である(ibid:30-31)。

ミースによって描き出されているのは、グローバル経済の構造的矛盾である。ミースによれば、グローバル経済のもとで、すべての人々が一定の権利を保障されている賃労働者になることや、すべての国々が先進国の生活水準を達成することは不可能である。つまり、資本主義経済は多くの無権利の労働者によって成り立つものである。ミースは、途上国が「先進国並みに」に、またパラレルな関係として、女性が「男性並み」になるような、この氷山モデルの水面上へ上昇しようとする戦略を「キャッチ・アップ型開発の神話」(Mies 1993:55-68)と呼んでいる。

重要なのは、この資本主義経済のヒエラルキー的な構造こそが継続的な資本蓄積、いわゆる経済成長を可能にしている点である。ヴェールホフは、マルクスとローザルクセンブルクの考えを発展させて、「継続的本源的蓄積過程」を論じている。

まず、マルクスの「本源的蓄積過程」について確認しておきたい。資本主義の前史として描かれたこの過程は、ヨーロッパの農民がコモンズ(共有地)の囲い込みによって土地(生産手段)から切り離され、労働力を売ることを余儀なくされている賃労働者が創出される過程である¹¹。さらに、ローザルクセンブルクは世界の植民地化過程もまた本源的蓄積過程の一部として分析した。

では、ヴェールホフの「継続的本源的蓄積過程」をみてみたい。その対象とされるのは、「産業の中心諸国における主婦、南の農民や——南および北において——いわゆるインフォーマルセクターにおける周辺化された人々の労働」(ibid:11)である。つまり、グローバル経済の氷山モデルの水面下の人々が創出される、現在も続く過程である。

この「継続的本源的蓄積過程」は、別の言い方をすれば「主婦化」の過程である。ミースやヴェールホフ、ベンホルト＝トムゼンはこの概念を共通の認識としながら資本主義経済を分析している。「主婦化」は大きく分けて二つの側面を持つ。一つは、女性が男性(賃労働者)の妻そしてその夫婦の子どもの母親となり、「労働力の再生産」のためのサブシステム生産を担う「主婦(無償労働者)」になる側面である¹²。もう一つは、「主婦化された賃労働」という側面である。

主婦化とは、労働力の無償の再生産だけでなく、家事労働あるいは類似した労働諸関係において女性によって主になされる、もっとも安価であるような生産労働を意味する(ibid:34)。

二面性のそれぞれの特徴を段階的に言い表すならば、第一段階は、工業社会において制度化さ

れた性別役割分業のもとで、女性が主婦として位置づけられる過程である。さらに、第二段階においては、ポスト工業社会への移行のもとで男性にも適用される概念であり、正規の賃労働者とは対極的な「無権利低賃金労働者」(小熊 2012)が多く生み出される過程であると言える。「主婦化された労働とは、家事の性質を内包した労働、すなわち、労働組合や労働法によって保護されることなく、いつでもどんな価格でも利用可能で、(…)組織されていない等々の特徴を持つ労働」であり、「労働のフレキシブル化」とはこのモデルに沿った労働の再編成である(Mies, Bennholdt-Thomsen and Werlhof 1988=1995:30)。賃労働における主婦化を明示的に表すためにこのような労働を「主婦化された賃労働」と呼んでもよいだろう。

最後に、世界システム論・パースペクティブにおいて、自然と人間の関係、ジェンダー関係についてまとめておきたい。ミースたちによれば、サブシステム労働の搾取は、生を創造し生を維持する特徴のために、資源としての自然の搾取の例に倣っている。そして女性を「自然化」することによってのみ、「ジェンダーによる分業、賃労働と家事労働、公的労働と私的労働、生産と再生産の分業が可能になっている」という。ミースたちは次のように述べている。

天然資源は‘自由財’とみなされ、女性によって創造される生と同じ方法で産業システムによって搾取され領有される。この分析は産業システムにおける、男性－女性関係だけでなく人間と自然の関係を考察する新しい方法を開く鍵である(Bennholdt-Thomsen and Mies 1999:12)。

つまり、ミースたちが教えるところでは、人間と自然の関係とジェンダー関係のあり方は密接に関係しており、切り離して考えることはできない。

2-2 サブシステム・パースペクティブ

ミースたちは、自然や他者を搾取する資本主義経済の批判から「視座を転換」し、「自律的なサブシステム」を構築する人々の営みのなかにグローバル経済のオルタナティブが胚胎していることに可能性を見出そうとする。例えば、ケニアのマラグアに住む女性たちが輸出作物の生産を拒否し、ローカルな取引のための作物や自給作物を生産することによって、自律的なサブシステムを取り戻す事例が紹介されている。彼女たちは、より多くの貨幣を求めず、「商品の生産」ではなく「サブシステム生産」に価値をおくことによって「よい生活」をつくりだした。ミースはブラウンヒルらの「ジェンダー関係と持続可能な農業」(Brownhill, Kaara and Turner 1997)をサブシステムの観点から読みなおしている。この女性たちの闘争は「ジェンダー化された抵抗」(ibid:40)として捉えられている。以下は、その物語の骨子である。

中央ケニアにおける女性農民は夫が所有する土地で働き、かつ生産した食糧を管理する権利を持っていた。また、誰もが皆女性たちは少なくともひとつ女性グループに属しており、女性たちには集団で働く伝統があった。

1963年の独立以降に、コーヒー生産が持ち込まれたとき、女性たちは夫の換金作物畑で夫の利益だけになるコーヒー生産を拒んだ。ただうまく「主婦化」された女性だけが女性グ

ループから離れて換金作物畑で働いたが、彼女たちはこれまでのように収穫物を管理することはできなかった。

1970年代前半まで、コーヒー生産は小農民にとってよい収入を生み出し、国家にとってはより多くの外貨を生み出した。しかし70年代の後半になると、世界のコーヒー価格は下落し、アフリカのコーヒー価格は80年から90年の間に70%まで暴落した。

このコーヒー価格の下落によって、女性たちのコーヒー生産に対する報酬は何もなくなった。「もうこれ以上コーヒーを摘みたくない」。女性たちは夫にコーヒーの世話をやめると言ったが、夫は妻たちを家の外へ追い出すと脅した。政府の役人は、妻と夫のあいだを仲介し、結婚生活とコーヒー生産の両方を維持することを求めた。彼らは、女性たちの労働がコーヒー生産のためにいかに重要かを知っていたのである。世界銀行とIMFは構造調整プログラムを用意し、コーヒー生産拡大のために融資をした。政府は反抗的な妻をコーヒー生産に戻らせるように、夫により多く支払った。しかし、女性たちは次の行動を起こした。

女性たちはコーヒーの木のあいだに豆を植えはじめたのである。そして、子どもたちにより多く食べさせ、化学物質で汚染された土壌をもとに戻そうとした。しかし、これでは十分ではなかった。女性たちは夫や政府の役人がサブシステンス食糧や安定的な現金収入に対する要求を満たそうとしないと理解した時、最終的に彼女たちは直接行動をとった。コーヒーの木を引き抜き、それを薪に使ったのである。マラグアの女性たちは、コーヒー生産の代わりに自家消費とローカルな取引のためにバナナと野菜を植えた。女性たちは、必要以上の現金収入を得ることに関心がなく、生活の保障を確保しようとした。この「自律的なサブシステンスの奪還」のための抵抗は、ケニアや東アフリカや中央アフリカで繰り返された。男性もまたローカル市場のために生産する方がよいことを悟り、女性の闘争に加わった。女性たちは、政府が押しつけようとしていたネオリベラルな囲い込み政策を物ともせず、生産者による土地に対してと、生産のタイプに対してのコントロールを取り戻した¹³。

以上の物語より、マラグアの女性たちが教えることはいくつかあるが、自然との関わり方とジェンダー関係の二点に注目したい。

第一に、自然との関わり方である。開発政策のもとで、コモンズ(共有地)は領有され、土地は輸出用作物のために「利益(資本蓄積)」を生み出す「資源」となった。より多く生産するために化学肥料が使われ、国際資本(化学産業など)は利益を得る一方で、土壌は汚染される。女性たちがしたことは土地に対するコントロールを自分たち生産者の手に取り戻すことであった。ブラウンヒルらによれば、彼女たちは「ローカルに食糧を栽培し取引するという暮らしの経済が食糧保障を創造する唯一の効果的な手段であることを実証した」(ibid:40)。つまり、彼女たちは資源として自然を利用し尽すのではなく、自分たちの生活に必要な最低限の範囲で自然を利用することによって、持続的な自然との関わりを可能にした。

第二に、ジェンダー関係である。伝統的に、女性たちは集団で働いていた。だが、輸出用作物の生産が導入された後、女性たちは慣習的な女性グループから引き離されて夫の換金作物畑で個々に働くことになった。グローバル経済の頂点に位置する国際資本とその機関は、国家に負債を課すことで輸出生産を強制する。国際資本、国家、男性(夫)の権力は互いに密接に編みあわさ

れている。資本主義経済がより多くの蓄積を可能にするためには、伝統的なジェンダー関係を解体し、家父長制的な結婚制度のもとで女性を「主婦化された個人」に変えなければいけないということである。

しかし、マラグアの女性たちはそれを拒否した。つまり、彼女たちは新しいジェンダー関係を受け入れ「主婦化された個人」として、支配的なシステムにおいて上昇しようとしなかった」(Bennholdt-Thomsen and Mies 1999:217)のである。マラグアの女性たちは、「商品の生産」に価値を置いてより多くの貨幣を求めることを拒否した。「サブシステンス生産」を生活の基盤にして暮らすことを貧困とみなさなかったからである。この場合のサブシステンスは資本を頂点とする氷山モデルの下部には位置づけられない。

ミースたちによれば、サブシステンス・パースペクティブにおけるサブシステンスは「オルタナティブな社会的志向、すなわち、必要性の範囲内で自由、幸福、自己決定」(ibid:19)を含意する。マラグアの女性たちが教えることから、サブシステンスの領域は、私たちの生が資本蓄積に方向づけられるか、それとも生の営みそれ自体であるサブシステンスの営みに方向づけられるか、せめぎあう場であると言えるだろう。

3 サブシステンスの視座からイリイチのジェンダー論を再読する

イリイチ研究者のデイヴィッド・ケイリーによれば、イリイチは「(ジェンダー論の意図は)歴史的研究であり、政治的な処方箋ではない」(Cayley 2005=2006:61)と考えていた。このような立場から、本節ではミースの議論とつきあわせ、資本主義が成立する前提条件の一つとして「ヴァナキュラーなジェンダーから経済セックス体制への移行」が示されていることを明らかにしたい。『ジェンダー』(訳 1984)では、サブシステンスは玉野井芳郎によって「人間生活の自立・自存」という語が当てられているが、ここではそのままサブシステンスと表記する。

3-1 サブシステンスから市場経済への移行——コモンズから資源へ

イリイチは、ミースと同様に、資本主義の浸透によって、人々の生を維持する手段が地域に固有なサブシステンスの営みから市場経済へ移行したという枠組みで捉えている。この移行の過程と並列して、「コモンズ」が「資源」へと変質していくことも彼は強調している (Illich 1982=1984:15)。

はじめに、市場経済と対比されるサブシステンスの営みとはどのようなものか、みていく。イリイチによれば、サブシステンスはコモンズと密接に関わっていた。彼によれば、コモンズは日本の「いりあい(入会)」にきわめて近く、私有財産ではなく共同体における慣習法のもとで保護された環境である。人々はサブシステンスの営みのなかでコモンズを使用する権利、例えば、道を使用する権利、漁や狩りをする権利、放牧する権利、そして森でたきぎや薬草を集める権利を持っていた (Illich 1983=1999:44-45)。つまり、コモンズとしての自然は共同体で管理されることによって過剰な利用(環境破壊)が抑えられながら、人々の生活の必要を満たしていた¹⁴。

イリイチによれば、これらサブシステンスの営みは、「ヴァナキュラーな文化」に埋め込まれたものであった。彼によれば、「各労働者がみずからの生産手段のみずからの手でコントロールする」(Illich 1981=1982:53)、「小規模で多様な、ヴァナキュラーな共同体」は「サブシステン

スのための社会的条件」(ibid:69)である。玉野井はヴァナキュラーを「その土地の暮らしに根ざした固有の」(ibid:5)と説明する。端的に言えば、ヴァナキュラーな文化とは、資本主義経済のもとで広がる文化的同質性、すなわちモノカルチャーと対比される多様性に富んだものであると言えるだろう。

次に、イリイチがどのように市場経済を捉えられているかみていく。カール・ポランニーに依拠するイリイチは、資本主義の浸透によってもたらされた近代の経済秩序を「稀少性の体制」と呼んでいる¹⁵。環境は、コモンズの囲い込みによって、第一義的に「企業」のための「稀少なもの」としての資源となった。「企業は、賃労働の組織化によって、自然を基本的ニーズの充足のために消費者が頼らなければならない財とサービスに変質させた」のである(Illich 1983=1999:46-49)。つまり、コモンズの囲い込みによって、人々の生を維持する手段は自律的なサブシステムの営みから次第に市場経済に依存するものとなっていった。イリイチはこのコモンズの囲い込みを「サブシステムに対する戦争」とも呼ぶ¹⁶。

近代経済学は「稀少性」の仮定のもとで合理的に行動する「ホモ・エコノミクス」(経済人としての個人)¹⁷という普遍的な「人間」を想定している¹⁸。このような人間観はヴァナキュラーな文化においてはみられず、近代において構築されたものである。このような発見から、ジェンダー論は導き出されたと考えられるだろう。

3-2 ヴァナキュラーなジェンダーから経済セックス体制へ

まず、最初に区別しておかなければならないことがある。それはジェンダー概念の使い方である。ジェンダーは今日において、セックス(生物学的性差)に対する社会的文化的に構築された性差を表わす概念として一般化している。しかし、イリイチの場合はそれとは異なる。イリイチのいうジェンダーは必ずヴァナキュラーな文化と結びついたもの(「ヴァナキュラーなジェンダー」)であり、国民国家の台頭や資本主義経済への移行によって失われたものである(Illich 1982=1984:382-383)¹⁹。

イリイチは次のように『ジェンダー』の冒頭で書いている。

私はジェンダーの支配する世界 the reign of gender を稀少性の体制に対置させる。私はヴァナキュラーなジェンダーの喪失が資本主義の出現と産業的に生産される商品に依存する生活スタイルにとって決定的な条件であることを議論する(Illich 1982:3)。

この文章に端的に表れているように、イリイチは資本主義経済への移行に際して必要とされる条件について、「性」を切り口にして論じようとした。つまり、イリイチは、市場経済への移行の際に、ヴァナキュラーなジェンダーが障壁となることを発見した。例えば、ミースが論じていたマラグアの女性たちは「主婦化された個人」となることを拒否することによって、自律的なサブシステムを維持した。マラグアにおけるこの伝統的な女性集団のネットワークをヴァナキュラーなジェンダーに根ざしたものとして理解することもできるだろう。

イリイチによれば、「ヴァナキュラーなジェンダー」と「経済セックス体制」は対置されるものであり、経済セックス体制とは「賃労働者と主婦」の組み合わせである。また、イリイチは、

賃労働を補完する無償労働を「シャドウワーク」と呼び、その典型を主婦の家事労働にみた (Illich 1982=1984:382; 1981=1982:72, 231)。サブシステンス生産がシャドウワークとして賃労働に従属したものになる過程は、ミースたちの言う「主婦化」の過程と一致する。

イリイチがヴァナキュラーなジェンダーと近代の性別役割分業のあいだに決定的な断絶を見ているのは、以下に明示されている。

ヴァナキュラーなジェンダーと性役割のちがいは、ヴァナキュラーな話しことばと教えられた母語とのちがい、サブシステンスと経済本位の生活とのちがい、になぞらえることができる (Illich 1982=1984:170)。

人々の生を再生産する手段が多様なサブシステンスの営みから市場経済に依存するものへ移行したという枠組みにおいて、ヴァナキュラーなジェンダーは「経済セックス体制」のもとへ標準化、普遍化されていく。モノカルチャー化になぞらえるならばモノジェンダー化と言えるだろう。イリイチが「経済的中性者」(ibid:11)という言葉で言い表しているものは、「経済」本位の「ホモ・エコノミクス」であり、ミースがいう「主婦化された個人」も含意するものである。

イリイチがもっとも強調するのは、同じ無償労働でありながらも、それが置かれる社会的文脈が決定的に異なる、サブシステンスの営みとシャドウワークの違いを区別することである²⁰。もし賃労働に光があてられれば(価値が与えられれば)、サブシステンス生産は影すなわちシャドウワーク(価値の引き下げ)となる。しかし、賃労働に従属しないところ、すなわち「自律的なサブシステンス」の営みにおいては影にならない。

4 サブシステンスの両義性

以上、ミースおよびイリイチのサブシステンスの視座を概観した。両者ともにサブシステンスの営みと市場経済を対置させながら、人間と自然の関係のあり方、ジェンダー関係のあり方の歴史的变化を分析している。

ミースとイリイチによれば、市場経済において、自然はコモンズから資源となった。この過程と並行して、ジェンダー関係の変化、ミースによれば女性の主婦化、イリイチによれば女性労働のシャドウワーク化が起こった。主婦化は「サブシステンス労働のシャドウワーク化」と言い換えられるだろう。女性のサブシステンス生産が男性の賃労働者および資本主義に従属する——シャドウワークとなる——ことは、彼らにとって必要なことである。ひるがえって、ケニアのマラグアの女性たちが教えるように、女性たちがそれを拒否すれば、資本主義的グローバル化はたちゆかなくなるかもしれない。

つまり、サブシステンスは両義性にかかっているということである。確かに、主に母親によってなされる家事や育児は、「労働力の再生産」のための再生産労働という側面を持っている。その限りでは、それらは性別役割分業の枠組みのなかでのシャドウワーク、すなわち、資本主義経済に従属した「サブシステンス生産」である。「母性」という規範は、女性たちにそのようなジェンダー役割を引き受けさせてきた。それゆえ、母親たちが子どものいのちの視点から反原発や環境保全を訴えるとき、その行為は「私的な」愛情によるものとして理解されるかもしれない。しかし、

母親たちに代表される「子どもたちを守りたい」という声を「社会への問い」として読むこともできる。その場合、彼ら彼女たちは経済活動が優先され、生命や生活が軽んじられる社会秩序に異議申し立てをしているのだといえるだろう²¹。その意味では、彼女たちの声は、賃労働に価値がおかれ、「サブシステム生産」がシャドウワークとして資本に従属し、生きることにそれ自体を目的とするサブシステムの営みにおける豊かさを奪われている社会のあり方を問うている。

エコフェミ論争やチェルノブイリ事故が起こった80年代には、高度大衆消費社会を迎え、より多くの商品が生産され消費されることが豊かさを象徴するものだった。男性の雇用が安定し、女性の多くが主婦であった時代でもあり、市場の裏側は「家庭」におけるシャドウワークとしてしか想像されえなかっただろう。しかし、雇用や家族の制度が揺らいでいる現在、サブシステムの可能性が論じられるのではないか。

ネオリベラリズムに対するオルタナティブとしての、ミースたちの「サブシステム・パースペクティブ」は、自然や他者を領有し搾取するのではなく、協働的で、サブシステムの営みそれ自体を幸福の源泉とするような暮らし方を含意する²²。それは、人間と自然の関係、そして資本主義的ジェンダー関係を構成している、生産労働と再生産労働の間のヒエラルキー的な社会関係を根本的に問い直すものである。しかし、資本主義への批判であり、かつそのオルタナティブでもあるサブシステム・パースペクティブは、経済成長こそが豊かな社会を実現し、賃労働こそが「よい生活」をもたらす絶対的な手段だと考えられて疑われない社会では、未来への展望ではなく過去への後退として現われたのではないだろうか。

むすび

80年代から現在までを見てみれば、ネオリベラル政策のもとで市場経済が拡大する方向に進んだ。先進国においても、グローバル経済の氷山モデルのなかでごく一部の女性が上昇する一方で、水面下には「主婦化された賃労働」が広がりつつある。またそれは女性のみならず男性の非正規雇用層も含み込んでいる。竹信三恵子が『家事労働ハラスメント』（2013）として指摘するように、家事労働を担っていたり、また担うことを期待されている女性たちの多くは、正規雇用から排除されており、またそれだけでなく、ケア労働などの家事労働は市場化されてもその多くが低賃金無権利労働である。途上国では、ケニアの事例で見たように、経済のグローバル化を通じて、自律的なサブシステムに対する戦争が進行している。人間の生きられる条件を構成しているサブシステムはますます不可視化され、その生産の成果が収奪されているといえるが、自然を破壊し社会の個人化を進める資本主義は、自らその土台でもあるサブシステムの基盤を掘り崩し、かつてないほど不安定で頼りないものとして現われている。いわば資本主義を自明のものとする「視座」が揺らぎつつあるのが今日の状況と80年代の違いではないだろうか。そうであれば「視座を転換」し、サブシステムの営みを他者と共有し喜びとするようなオルタナティブな豊かさを見出すことは当時よりもいっそうリアリティを有しているのではないだろうか。

1 例えば近藤牧子（2012）にも記録されている。

2 「エコロジーの主張とフェミニズム」（金井1989:17-25）、「エコフェミ論争」（大越1996:138）参

- 照。また、萩原によれば「80年代後半、日本においては、母親を中心とした反原発運動や環境運動は母性主義を強調するもの、あるいは性別役割分担を肯定するものである等の批判がなされ、論争に発展した（エコフェミ論争）」（萩原 2002:45）。
- 3 桜井裕子によれば、エコフェミ論争は、青木(1983)に対し、上野「女は世界を救えるか？」（『現代思想』1985年1月号）が青木とイリイチを徹底的に批判し、青木が「フェミニズムの未来」（同4月号）と題して、上野に再反論を試みたことが発端となったものである。その後、日本女性学研究会による「フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー」と題するシンポジウムにおいて、青木と上野による討論が行われたとされる。桜井は、「エコフェミ理論の持つ危険性が多く指摘された」、その主要な論点をエコフェミの「反近代主義」と「母性主義」に対する批判としてまとめている（桜井 1990）。この論争については、他にも、金井淑子（1989）、大越愛子（1996）、江原由美子（1990）、西川祐子（1997）、千田有紀（2009）等、数多く言及されており、エコフェミ論争がフェミニズム研究において一定のインパクトを持ち、歴史的な意味を持つものであったことが示唆される。
 - 4 金井（1990）や加納実紀代（1999）が伝えるように、注3のシンポジウムで、上野は、エコフェミニズムは「産む性、再生産」の問題を提起したのでであると理解を示し、「女なみ」平等を提案した（上野 1985）。金井は、「フェミニズムの80年代的課題は、近代が制度化した私的領域という女性領域の解体の中で展開されているという点である」（金井 1989:153）と指摘し、「フェミニズムの側から出ている近代批判には、この私的領域の意味の復権を志向しつつ、近代社会の分業的・二項対置的社会編成そのものを批判的に問い返していこうとする問題意識を内在させた思想ととらえられるはずだ」（ibid:154）と述べている。
 - 5 とはいえ、当時、足立真理子「エコロジカル・フェミニズムの地平をさぐる」（1986）がある。足立は、「エコロジカル・フェミニズムが、自然と社会の結節部にあって、その“動力”として労働を問う、というとき、（…）労働＝生産労働＝経済／エコノミーとおくのでなく、（…）労働＝享受＝共働／コンヴィヴィアリティとしての労働、つまり、労働を客観的世界から生活世界へと帰還させる方向を探ろうとするもの」（足立 2006:190）と説明するなどし、エコフェミニズムが一面的な理解に留まっていることを指摘しつつ、その可能性を掘り下げている。
 - 6 上野『女は世界を救えるか』（1986）に収録。
 - 7 上野だけではなく、萩原弘子「ジェンダー——コスモロジーと地獄の監獄」（1988）によっても酷評された。この論文は『新編 日本のフェミニズム理論』（2006）に収録されている。また、このような否定的な評価は日本に限定されず、例えばイリイチがジェンダー論を講義したカリフォルニア大学バークレイ校では、フェミニストたちが彼に反駁するシンポジウムを開いた（Cayley 2005=2006:61）。
 - 8 足立は上野との対談において、ミースらの理論を取り上げて、「世界システム論的な統一論というのは、確かにそれまでのフェミニズム理論に前提にされていた、いわゆる先進国中産階級白人フェミニズムの枠、（…）先進国中心主義の枠を外す、それを資本主義システムの中心／周辺構造の問題として理解することを可能にした」（足立 2000:12）と述べ、80年代フェミニズムの主流を反省的に捉えている。
 - 9 例えば、ウォーラスティン（1997）では「^{サブシステンス}自給」、ポランニー（2003）では「^{サブシステンス}生存」と特別にルビがふられている。また経済学では「subsistence economy 生存維持経済」、人類学では松井（1998）によって「生業」などと訳されている。また、「環境平和学」を提唱する横山正樹を中心とする研究者たちは「サブシステンス」をキーワードとして環境問題や南北問題にアプローチする（郭、戸崎、横山編 2005）。
 - 10 研究の初期とは『世界システムと女性』（Mies, Bennholdt-Thomsen and Werlhof 1988=1995）等。古田睦美は訳者解題で、ミースらがサブシステンスの概念をどのように構築してきたか解説している。また、古田（2005）に詳しい。
 - 11 Mies and Shiva（1993:283-284）、渋谷（2010:206）等参照。
 - 12 主婦創出の過程としてヨーロッパにおける魔女狩りが説明されている（Mies, Bennholdt-Thomsen and Werlhof 1988=1995:177-178）等。

- 13 Bennholdt-Thomsen and Mies (1999:214-217), Brownhill, Kaara and Turner (1997) をもとに著者作成。また、『環』（vol.12/2003年冬）において、古田はミースに「サブシステム・パースペクティブの可能性〔女性・環境・反グローバリズム〕」というテーマのもとでインタビューしている。そのなかで、ミースはこのケニアの女性たちの話を紹介している。
- 14 ヴェールホフとドゥーデンは資本主義の成立によって主婦と家事労働が生み出された過程を論じる（Duden and Werlhof 1986=1998）。訳者の丸山真人によれば、彼女たちはイリイチのシャドウワークの概念に決定的な影響を与えた。ドゥーデンによれば、コモنزの囲い込みによって、女性の生存手段は男性に依存する主婦となった。「領主および国家によるすべての土地の私有化とともに、たきぎ集め、落ち穂拾い、そしてもっぱら女性や子どもが受益者であった共同牧草地への、下層の人々の古い伝統的な権利が奪われていくことになる」（Duden 1986=1998:23）。
- 15 イリイチによる「サブシステム」と「稀少性の体制」の区別は、ポランニーによる「実体的な経済」と「形式的な経済」の区別に重なるようにもみえる（Polanyi 2003）。
- 16 ミースらによれば、「イリイチは、組合や賃金要求に対する闘争ではなく、サブシステムに対する戦いが資本の本当の戦いであると主張した」（Bennholdt-Thomsen and Mies 1999:19）。いうまでもなく、この「戦い」を本源的蓄積過程と呼ぶことも可能である。
- 17 久場嬉子（2002）参照。
- 18 イリイチは開発主義について、「この平和は、どこかの他人が生産した商品を消費することでもともとと生活する「ホモ・エコノミクス」という普遍的人間の尺度へと考えを切りかえること」（Illich 1981=1982:33）と説明している。
- 19 本稿で「ジェンダー関係」と言う場合には、イリイチの用法と異なり、一般的な用法に従い、社会的文化的性差によって構成される社会関係を指すものとする。
- 20 アンペイドワークの両義性としてシャドウワークとサブシステムの区別を明示的に論じている（川崎、中村編 2000）がある。渋谷望（2013）は「再生産」の両義性としてシャドウワークを資本主義の〈影〉、サブシステムを〈外部〉として位置づけた。
- 21 福島原発事故後においてはチェルノブイリ原発事故後と同じではなく、母親たちの問題提起は積極的に位置づけられている。例えば、渋谷（2011）は、反原発運動のなかの「人々の被ばくを最小化し、健康・生命を守る運動」のとくに子どもを守る局面について、「再生産領域を生産に優先するものとして可視化するもの」（ibid:64）として注目する。また、金井（2013）や岡野八代（2012）は、ケアの倫理などを援用しながら、母性主義に還元されない「母」の領域の可能性について論じている。
- 22 サブシステム・パースペクティブに連なる系譜として、イリイチにも依拠するセルジュ・ラトゥーシュ（2013）の脱成長論やサブシステムの可能性についても論じる鶴見和子（1999）の肉発的發展論を上げることができる。

【文献】

- 青木やよひ, 1985, 「フェミニズムの未来」日本女性学研究会フェミニスト企画集団編『フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー』松香堂
- 足立眞理子・上野千鶴子, 2001, 「表象分析とポリティカル・エコノミーをつなぐために」『アソシエ』
- 足立眞理子, 2006, 「エコロジカル・フェミニズムの地平をさぐる」天野正子他編『新編 日本のフェミニズム2 フェミニズム理論』岩波書店
- Bennholdt-Thomsen, Vernika and Mies, Maria, 1999, *The Subsistence Perspective : Beyond Global Economy*, Zed Book.
- Bock, Gisela und Duden, Barbara, 1977, 'Arbeit aus Liebe - Liebe ala Arbeit : Zur Entstehung der Hausarbeit im Kapitalismus', in : *Frauen und Wissenschaft*, Courage -Verlag. (丸山真人編訳, 1998, 「家事労働と資本主義の起源」『家事労働と資本主義』岩波書店)
- Brownhill, Leigh S, Kaara, Wahu M., and Turner, Terisa E., 1997, 'Gender Relation and Sustainable Agriculture : Rural Woman's Resistance to Structural Adjustment inKenya'. *Canadian Women's*

Studies, Vol.17, No.2.

- Cayley, David, 2005, *The River North of the Future*, House of Anansi Press. (白井隆一郎訳, 2006, 『生きる希望 イバン・イリイチの遺言』藤原書店)
- 江原由美子, 1990, 「フェミニズムの70年代と80年代」江原由美子編『フェミニズム論争 70年代から90年代へ』勁草書房
- 古田陸美, 2005, 「サブシステンスと市場経済」越智貢他編『岩波 応用倫理学講座4 経済』岩波書店
- 萩原なつ子, 1997, 「エコロジカル・フェミニズム」江原由美子, 金井淑子編『ワードマップ フェミニズム』新曜社
- 萩原なつ子, 2002, 「エコロジカル・フェミニズム」井上輝子他編『岩波 女性学辞典』岩波書店
- 萩原弘子, 2006, 「ジェンダー——コスモロジーと自律の監獄」天野正子他編『新編 日本のフェミニズム 2 フェミニズム理論』岩波書店
- Illich, Ivan, 1981, *Shadow Work*, Marion Boyars. (玉野井芳郎, 栗本彬訳1982『シャドウワーク』岩波書店)
- Illich, Ivan, 1982, *Gender*, Marion Boyars. (玉野井芳郎訳, 1984『ジェンダー』岩波書店)
- Illich, Ivan, 1983, 'Silence is a Commons', *The Co-Evolution Quarterly*, Winter. (桜井直文監訳, 1991, 「静けさはみんなのもの」『新版 生きる思想』藤原書店)
- 郭洋春, 戸崎純, 横山正樹編, 2005, 『サブシステンスの危機にどう立ち向かうか 環境平和学』法律文化社
- 金井淑子, 1989, 『ポストモダン・フェミニズム』勁草書房
- 金井淑子, 2013, 『倫理学とフェミニズム』ナカニシヤ出版
- 加納実紀代, 1991, 「社縁社会からの総撤退を」小倉利丸他編『働く／働かない／フェミニズム』青弓社
- 川崎賢子, 中村陽一編, 2000, 『アンペイド・ワークとは何か』藤原書店
- 近藤牧子, 2012, 「放射能汚染と生活を考える母親たち」村田晶子編『復興に女性たちの声を——「3・11」とジェンダー』早稲田大学出版部
- 久場嬉子, 2002, 「ジェンダーと「経済学批判」」久場嬉子編『経済学とジェンダー』明石書店
- Latouche, Serge, 2010, *Pour sortir de la société consommation*, Les Liens qui Libèrent (中野佳裕訳『〈脱成長〉は世界を変えられるか?』作品社)
- 松井健, 1998, 「マイナー・サブシステンスの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民俗の技術』朝倉書店
- Mies, Maria and Shiva, Vandana, 1993, *Ecofeminism*, Zed Books.
- Mies, Maria, Bennholdt-Thomsen, Veronika and Werlhof, Claudia von, 1988, *Women the Last Colony*, Zed Book. (古田陸美・善本裕子訳, 1995『世界システムと女性』藤原書店)
- 西川祐子, 1997, 「日本フェミニズム論争史②フェミニズムと国家」江原由美子他編『フェミニズム』新曜社
- 大越愛子, 1996, 『フェミニズム入門』ちくま新書
- 小熊英二, 2012, 『平成史』河出書房新社
- 岡野八代, 2012, 『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房
- Polanyi, Karl, 1957, 'The Economy as Instituted Process' *Trade and Market in the Early Empires*, The Free Press. (玉野井, 平野編訳, 2003「制度化された過程としての経済」『経済の文明史』ちくま学芸文庫)
- 桜井裕子, 1990, 「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか」江原由美子編『フェミニズム論争 70年代から90年代へ』勁草書房
- 渋谷望, 2010, 『ミドルクラスを問いなおす』日本放送出版協会
- 渋谷望, 2011, 「原発事故と再生産領域の抑圧」仁平典宏, 山下順子編『労働再審⑤ケア・協働・アンペイドワーク』大月書店
- 渋谷望, 2013, 「からみあう貧困・災害・資本主義——〈外部〉としてのサブシステンス」『社会学年誌54号』
- 千田有紀, 2009, 『ヒューマニティーズ 女性学／男性学』岩波書店

竹信三恵子, 2013, 『家事労働ハラスメント』 岩波書店

鶴見和子, 1999, 『鶴見和子曼荼羅 IV 環——内発的發展論パラダイム転換』 藤原書店

上野千鶴子, 1985, 「エコロジカル・フェミニズム批判——屈折したミニマリストの立場から——」 日本女性学研究会フェミニスト企画集団編『フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー』 松香堂

上野千鶴子, 1986, 『女は世界を救えるか』 勁草書房

上野千鶴子, 1996, 「「進歩と開発」という名の暴力」 上野千鶴子他編, 1996, 『リプロダクティブ・ヘルスと環境——共に生きる世界へ』 工作舎

綿貫礼子, 1996, 「リプロダクティブ・ヘルスの思想と環境」 上野千鶴子他編, 1996, 『リプロダクティブ・ヘルスと環境——共に生きる世界へ』 工作舎